

国際ボランティアの参画意識

—2016リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックを手がかりに—

片山昭義*

要約

2016年ブラジル・リオデジャネイロで開催されたオリンピック・パラリンピック競技大会の関連事業に関わる機会を得て、現地にて大会の公式ボランティア20人に対してインタビュー調査を行った。非常に前向きな意見が多く聞かれる中、ボランティア達の参画意識を最大限に引き出す3つのポイントが示唆された。1点目は「ボランティア＝無償」の考え方を是正すること。2点目はボランティア自身のモチベーションをいかに醸成するかという工夫。3点目は「ボランティアのマネジメント（評価の仕組み）」の確立である。これらの点は、2020年東京大会の成否にかかわる重要なポイントになるものと思われる。

キーワード オリンピック、パラリンピック、ボランティア、参画意識

目次

1. はじめに
2. 方法
 - 2-1 調査方法
 - 2-2 調査項目
3. 結果と考察
 - 3-1 インタビュー調査協力者プロフィール
 - 3-2 ボランティアの選考方法と研修内容
 - 3-3 参加動機
 - 3-4 家族の理解
 - 3-5 ボランティアに参加して良かったこと
 - 3-6 ボランティアに参加して残念だったこと（デメリット）
 - 3-7 オリンピック、パラリンピックの開催がブラジルに遺したもの（レガシー）
 - 3-8 オリンピックとパラリンピックの違い
 - 3-9 ボランティアが持つ専門性
4. おわりに

1. はじめに

2016年8月・9月（現地は南半球に位置するため冬）、南米初のオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、本大会とする）がブラジル・リオデジャネイロ（以下、リオとする）で開催された。オリンピックは206の国・地域から28競技306種目に出場選手10,500人^[1]、パラリンピックは159の国・地域から22競技528種目に出場選手4,342人を集めた大会であった^[2]。特にオリンピックにおいて日本は、金メダル12個、銀メダル8個、銅メダル21個、合計41個の歴代最多となるメダルを獲得^[3]し、競技内容も相まって大いに盛り上がりを見せた大会となった。

経済発展しつつあるブラジルにおいて、2014年のサッカーワールドカップ開催に続くメガスポーツイベントの開催は、全世界の注目を集めるとともに、ブラジルの更なる発展が期待されるイベントであった。しかしながら、政治不信や経済格差を起因とする国内情勢の悪化、伝染病の流行、開催都市リオにおける犯罪率の上昇は、大会開催の大きな不安要因となった。

このような状況においても本大会の準備は着実に進められ、ボランティアについては5万人の募集に対して、全世界から24万人の応募があったと言われている^[4]。大会運営に関わったボランティア達は、どのような目的を持って参加したのか、また参加してどのような成果を実感したのだろうか。

筆者は、本大会の開催期間を通して現地に設置された「Tokyo 2020 JAPAN HOUSE」（以下、ジャパンハウスとする）の運営スタッフとして現地に渡航する機会を得た。ジャパンハウスは、本大会を通して日本を全世界に向けて発信する場として、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が東京都や関係省庁と連携し主催するもので、オリンピック・パラリンピック競技大会東京大会（以下、2020東京大会とする）や東京・日本全体を盛り上げる中核として機能することが期待される施設である^[5]。この中でスポーツ庁は、わが国のスポーツ・レクリエーションの魅力を最大限発信することを目的として参画し、その業務を公益財団法人日本レクリエーション協会（以下、日本レク協会とする）に委託、日本レク協会の指導者養成課程認定校である本学の担当者として筆者が現地派遣スタッフとして委嘱されたのである。

現地に滞在したことを機に、ボランティアに対するインタビューを実施し、その意識や活動の実際を明らかにすることを通して、2020東京大会に向けたボランティアマネジメントの一助に資する提案を行うこととしたい。

2. 方法

2-1 調査方法

ジャパンハウスのスポーツ庁ブースにおいて、一緒に活動したボランティアスタッフである現地の日本人留学生の協力を得て、本大会において公式スタッフユニフォームを着用したボランティア20人に対して、競技会場内や路上にてインタビューを実施した。インタビュー

時間は平均30分程度であった。インタビューの内容は手書きのメモで記録し、当日の夜に共通のフォーマットを用いて整理した。

2-2 質問項目

インタビューにおいて、以下の11項目について聞き取り調査を実施した。

- 1) 協力者の基本情報（名前、年齢、性別、居住地、リオ以外の場合の滞在先、ボランティアの活動期間、その他）
- 2) 家族の理解
- 3) 報酬（報酬の有無、支給品、食事、交通費、その他）
- 4) 活動内容（役割決定の方法、実際に担当している役割）
- 5) ボランティアの選考方法
- 6) 研修内容
- 7) 参加動機
- 8) メリット（参加して良かったと思えたこと）
- 9) デメリット（参加して残念に思えたこと）
- 10) 本大会を通してブラジルに残った成果（レガシー）
- 11) オリンピックとパラリンピックの違い ※両方通して参加したボランティアに対してのみ

3. 結果と考察

3-1 インタビュー調査協力者プロフィール

インタビュー調査に協力してくれたボランティア（以下、協力者とする）のプロフィールを表1にまとめる。インタビューを実施した人数は合計で20人であったが、公式のボランティアユニフォームを着用している中にも無給と有給のボランティアが存在し、その割合は無給16人に対し有給4人であった。本研究の協力者としては、無給ボランティアの16人を対象とする。

表1 2016リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック大会 ボラテンティアインタビュー調査 協力者プロフィール

ID	氏名	年齢	性別	国籍	居住地	職業	Yカラー	B 仕事内容	B 担当期間	B 条件	取材日時	取材場所	備考
A	ホルヘ・ディアス	23	1: 男性	ペルー	●オリンピック期間ペルー人5人で共同部屋を借りた ●パラリンピック期間オリンピックで知り合った友人の家	休職中 ブラジルで就職したい 工業技術の大学を卒業	黄色	来場者の整理・誘導	オリンピックピクニック ピクニック	無給	9月8日	オリンピックパーク内	
B	ジェシカ・ブエノ	23	2: 女性	ブラジル	リオデジャネイロ以外友人の家に泊まっている	病院勤務 理学療法士 休みを取り、代替えしてもらった	赤色	アスリート対応の怪我をした時の応急処置やリハビリ	パラリンピックのみ	無給	9月12日	ジャパンハウススポーツ庁アース付近	専門職もボラテンティア
C	ラニエリ・アルベス	23	1: 男性	ブラジル	自宅から通勤(リオ市内)	コンサルタント	赤色	応急処置(以前から知識はあった、自志願)→医療ナースへ引き渡し	オリンピックピクニック パラリンピック	無給	9月12日	ジャパンハウススポーツ庁アース付近	
D	マリア・エレナ	63	2: 女性	ブラジル	リオ市内に1軒の家を借りて6人でシェア(ブラジル②、コロンビア②、アルゼンチン、オーストラリア)の研修時に知り合った仲間	教員(特別支援学校) 視覚障害、聴覚障害、発達障害担当 手がたできる	黄色	水泳・テニス競技のボラテンティアの統括・管理	オリンピックのみ 有給休暇を使つて参加	無給	8月5日	オリンピックパーク外の歩道上	統括管理の仕事をしててもボラテンティア
E	ポドロフ	36	1: 男性	ブラジル	サンパウロ在住 リオ市内に住む 妹さんの家から通勤	ジャーナリスト	黄色	メディア対応	オリンピック期間の1週間のみ	無給	8月10日	オリンピックパークチケット売り場付近	ボラテンティアの域を脱しているのでは? 1週間だけでもボラテンティアOK?
F	ミレーナ	20	2: 女性	ブラジル	自宅から通勤(リオ市内)	学生 (メカニック・エンジニアリング)	黄色	水泳、テニス、ハンドボールの各会場における競技運営	聴けていない	無給	8月10日	オリンピックパークチケット売り場付近	
G	ラウラ	26	2: 女性	コロンビア	現在サンパウロの大学院で勉強中 リオ市内のホステルに滞在	大学院生	緑	テニス担当 オーストラリア(チケット確認、座席への誘導)	オリンピックのみ	無給	8月11日	ジャパンハウススポーツ庁アース付近	緑でも種目の担当?

ID	氏名	年齢	性別	国籍	居住地	職業	Yカラー	B 仕事内容	B 担当期間	B 条件	取材日時	取材場所	備考
M	島田優太	22	1: 男性	日本	大学からの派遣 大学が用意したマン ションに、他の学生と 共に共同生活	大学生 東京外国語大学の 学生 現在ポルトガルに 留学中	黄色	オリンピックピック 期間：日本選 手団の生活サ ポート (競技会場や買 い物などに同 行、通訳) オリンピック 期間：選手 村の医療セン ター	オリ ン ピック パラリ ン ピック	無給	9月14日	オリンピック パーク内	彼の紹介で 東京外国語大学のス タデイツプアーがあっ たことを知る
N	マリアナ	23	2: 女性	ブラジル	リオから飛行機で3時 間の町から参加 現在は市内の友人宅に 滞在	大学生 経済学を専攻	緑	誘導(カート の運転など) ただし日に よって仕事 異なる 7:30に出勤し て仕事が割り 振られる	パラリ ン ピック のみ	無給	9月17日	オリンピ ック パーク出口付近	
O	リダ	55	2: 女性	ブラジル	自宅から通勤 (リオ市近郊)	エステティシヤン	黄色	VIPの生活の お世話(通訳 として買い物 などに同行) オリンピック の時にはIOC のトッププのお 世話もした 英語、スペイン 語、ポルト ガル語話せる 現在日本語も 勉強中 (2020年には東 京に行きたい)	オリ ン ピック パラリ ン ピック	無給	9月17日	オリンピ ック パーク出口付近	無給であつても、能 力を参照し重要な役 割に就けているの か？
P	レオニ ダス	68	1: 男性	ブラジル	自宅から通勤 (リオ市近郊)	定年退職 元郵便局長、画家	緑	会場受付 (チケット チェック)	オリ ン ピック パラリ ン ピック	無給	9月17日	オリンピ ック パーク出口付近	

Q	ファイマ	62	2: 女性	ブラジル	自宅から通勤 (リオ市近郊)	定年退職 元小・中学校教員 現在観光関係の ボランティア	黄色	ボランティア コーディネーター	オリック ピラリン ピラック	有給	9月8日	オリック パーク内	元教員(公務員)と いうことで、行政か らボランティアの統 括を依頼されている ようである
R	ブルノー	41	1: 男性	ブラジル	自宅から通勤 (リオ市近郊)	マーケティング会 社勤務 オリック・ピラックの パラリンピピックの 関係企業	黄色	聞いていない	オリック ピラリン ピラック	有給	9月14日	オリック パーク出口付近	オリック関連の 企業から社員が派遣 されているようであ る
S	エドウト	65	1: 男性	ブラジル	自宅から通勤 (リオ市近郊)	アルバイト 旅行会社の募集に 対して応募	紺色	観客の駅～会 場間の案内・ 誘導	オリック ピラリン ピラック	有給	9月17日	オリック パーク出口付近	旅行会社(市の交通 局が委託)のアールバ イトは紺色を着用して いるようである
T	エリオ	26	1: 男性	ブラジル	自宅から通勤 (リオ市近郊)	旅行会社勤務 カーニバルや 各種イベントを 担当	紺色	観客の駅～会 場間の案内・ 誘導	オリック ピラリン ピラック	有給	9月17日	オリック パーク出口付近	旅行会社の社員もス タッフとして駆り出 されているようであ る

(1) 年齢

20代9人、30代2人、40代1人、50代2人、60代2人、平均年齢35.1歳であった。

※20代の内訳（男性4人女性5人、ブラジル4人日本3人コロンビア・ペルー各1人）

(2) 性別

男性7人、女性9人であった。

(3) 国籍

ブラジル11人、日本3人、ペルー1人、コロンビア1人であった。

日本人はブラジルに来た留学生2人と東京外国語大学のプロジェクトとして実施されたスタディツアーの大学生（インタビュー当時ポルトガルに留学中）1人であった。

(4) 居住地

自宅6人、友人・知人宅5人、ホテルや借家5人であった。

ボランティアに対しては、リオまでの交通費や活動期間中の滞在費、勤務時間以外の食事は支給されないことから、大きな負担を承知しながら参画していることが窺える。

(5) 公式ボランティアの担当役割

公式ボランティアは、その担当する役割によりユニフォームの色が定められている。ちなみに黄色は競技場内の運営スタッフでありチケットチェックや競技場内の観客の案内、座席への誘導などを担当する。緑色はイベントスタッフでありインフォメーションやオリンピックパーク内の誘導、カートサービスの運転、迷子システムの案内などを担当する。そして赤色は医療スタッフであり応急処置や健康相談などを担当する。今回インタビューすることはできなかったが、他に青色と紫色のユニフォームがあり、青色の担当は競技運営スタッフであり審判や選手の誘導、紫色は清掃スタッフとして担当する。参考までに最寄駅からオリンピックパークまでの交通案内は、旅行会社が手配した有給スタッフであり、紺色のユニフォームを着用していた。

協力者の内訳は、黄色9人、緑色5人、赤色2人であった。

(6) 支給される物品

公式ボランティアには、ユニフォームをはじめ様々な物品やチケット類が支給される。これらの物品は、ボランティアのモチベーションを高める重要なアイテムとなっており、ボランティアとしての役割を遂行するにあたって、責任感を持って担当するために不可欠な要素となっている。以下に支給される物品やチケットのリストを提示する。

○提供物品

- ・シャツ（カラー別）3枚
- ・ズボン（長ズボン、半ズボン）各1枚
- ・靴下3足
- ・ジャケット1枚
- ・帽子1個
- ・時計（スウォッチ）1台
- ・バッグ1個
- ・雨具（カッパ）1組
- ・水筒1個
- ・ペットボトルホルダー1個
- ・靴1足
- ・チケットホルダー1個

○食事

- ・勤務時間中の食事（レストランチケット） 1食

○交通費

- ・担当期間の公共交通機関のパス 1枚

○その他

- ・役割によっては（特に緑色シャツの担当）、競技の観戦チケット

なお、オリンピックとパラリンピック両方担当するボランティアは、シャツ、ジャケット、帽子、雨具の物品について、パラリンピックのマークがついたものが改めて支給されたようである。

(7) 担当期間

オリンピック期間のみ5人、パラリンピック期間のみ3人、両方の期間7人、未聴取が1人であった。両方の期間を担当した協力者に注目し、職業を調べてみると社会人3人、定年退職者2人、求職中1人、大学生1人であった。当初、大学生が多いと想定したが、特にパラリンピック期間は大学の授業が始まっている時期であり、両方の期間を通して長期に担当できるのは、職場に理解があり休職制度などが整っている社会人か定年退職した高齢者が多いことが分かった。

3-2 ボランティアの選考方法と研修内容

本大会に応募したボランティアは、ブラジルのみならず世界各国から約24万人が応募したと言われている。この中から5万人に絞り込む過程では、webシステムを活用した一般的な常識を問う質問や接遇の基本的対応を問う質問を通して、ある程度の人数まで絞り込まれたようである。その後ブラジル各地に設定された面接・トレーニング会場にて自己紹介やボランティアの経験を尋ねるグループ面接や、オリンピック・パラリンピックで必要とされるものは何かといったグループディスカッションを通してコミュニケーション能力やボランティアへの意欲などを判定したとのことであった。

国外からの希望に対しては、skypeシステムを利用して面談を行い、コミュニケーション能力や語学力、そしてやる気などを判定したようである。

このような選考を経たボランティア達は、3つほど希望のセクションを候補として提示し、本人の経歴や専門性、コミュニケーション能力や語学力等を総合的に勘案されて担当セクションが割り当てられたようである。ボランティアの中には、必ずしも希望のセクションに配属されるとは限らず、不本意な役割になってしまうこともあったという。

事前研修については3日間のトレーニングが義務付けられ、担当する現場にて各セクションの役割内容や来場者との対応方法、オリンピック・パラリンピック競技に対する基礎知識、来場者の多様性（障がいの有無や外国人）の理解、そしてボランティア同士のチームビルドが主な内容だったようである。

協力者は研修内容に対して、無理なく実際に即した内容であったことや、実際の役割を遂行する段階でも特に困ったことは無いようで、概ね好評であった。

筆者が以前に行った調査^[6]においても、ボランティアを養成する内容としてはボラン

ティアへの期待と責任、当該事業の理解、担当する役割の運営技術、安全管理、そして現場でのシミュレーションが必要であり、時間的には2～3日間10時間程度が妥当であると報告した。このことから、本大会のボランティア研修は妥当なものであったと推察される。

3-3 参加動機

協力者へのインタビューからボランティアに参加する条件として、①オリンピック・パラリンピック各期間のうち10日間以上担当できること、②自宅以外から参加する場合の宿泊費やリオまでの交通費、担当時間以外の食費は自分で負担すること、③1日9時間（うち1時間は休憩時間）の役割に従事できること等が示されており、ボランティアを担当するためには、多くの負担を強いられていたようである。そのような状況の中、協力者は何故ボランティアに参加したのだろうか。

※複数の回答があった意見には、その人数を丸数字で表示

○オリンピック、パラリンピックに関わりたい

- ・とにかくオリンピック、パラリンピックのボランティアがしたかった③
- ・オリンピックに関わるのが夢だった
- ・身近な場所でこんなに素晴らしい大会があるのに、手伝わずにはられない②
- ・オリンピック、パラリンピックとはどのようなものか興味があった

○自己成長できる

- ・簡単にはできない体験がしたい③
- ・唯一の体験ができる②
- ・自分の成長
- ・キャリアにつながる②
- ・新しいことに挑戦できる
- ・自分の限界を超えてみたい
- ・就職活動の際、キャリアとして有利になると思った
- ・人に紹介できる自分自身の“歴史”を作りたい

○勉強や学習活動として

- ・ポルトガル語の勉強がしたかった②
- ・（ポルトガル語を学んでいる身として）語学を生かして仕事するというイメージづくりをしたい
- ・大規模イベントのスタッフ体験を通して、自分が学んでいる“経済”を実感したい

○スポーツが好き

- ・純粋にスポーツが好きである④
- ・サッカーワールドカップの時もボランティアをしたから

○タイミングが良かった

- ・ちょうど休みが重なった

- ・留学をオリンピック開催時期に合わせて設定②

○様々な人と交流したい

- ・世界各国の方と交流したい④
- ・障がいを持った方と関わることにより、私自身の心情が変化することに期待

大きくは上記の6つに区分されるようである。特に協力者の多くが「自己成長ができる」事を挙げており、オリンピック、パラリンピックという特別な場だからこそ特別な体験ができるという期待や、自分自身の成長を実感できるような挑戦をしたいと思っている人が多いようであった。

3-4 家族の理解

犯罪の発生率が高いリオにおいて、長期間活動することが家族にとっては不安であったと思われる。実際に協力者の家族はどのような状況だったのだろうか。協力者別のコメントを紹介する。

- ・【A】 出発前は心配していたが、活動状況をフェイスブックで知らせたところ、様々な経験をしていることに満足してくれ、今では応援してくれている。
- ・【B】 喜んでくれ、様々な面でサポートしてくれた。
- ・【C】 応援してくれた。
- ・【D】 最初はとても心配していた（特に娘さん）が、本人の意識や意欲が高く、今では応援してくれている。
- ・【J】 高齢であり、かなりハードな仕事内容に今でも心配してくれている。
- ・【K】 家族全体がスポーツ好きなので、全面的に応援してくれている。
- ・【M】（既に留学中であることもあり）「分かった、頑張っただけ」と一言だけであった。
- ・【N】 現在も一人暮らしなので心配していなかった。

全体的な傾向としては、最初は心配しているが、本人の意思の強さや意欲の高さを示すことにより最終的には応援してくれるという人が多いように思われる。また、活動状況を丁寧に知らせることも安心度を高めてもらう効果的な方法のようである。

3-5 ボランティアに参加して良かったこと

時間的、金銭的、精神的な負担を負いながらボランティア活動に参加することで、協力者はどのようなメリットやバリューを得ているのだろうか。

※複数の回答があった意見には、その人数を丸数字で表示

○人的ネットワークの拡がり

- ・ボランティア仲間と知り合えた⑥
- ・世界中のジャーナリストと知り合えた
- ・自分が、人と関わるのが好きであることを“再確認”できた②
- ・(日本人として) ボランティアの中の“自分の位置”が認識できるようになった

○未知の体験

- ・新しい体験ができた
- ・ブラジルを知ることができた②
- ・すべての瞬間が素晴らしい②
- ・人生観が変わるような体験ができた

○自己実現

- ・来場者や競技者の助けになることができた⑤
- ・自分が役に立つ存在であることを実感③
- ・楽しく役割を担うことができた
- ・将来の職業の目標を持つことができた
- ・多言語を話せることが自分の“武器”であることを実感③
- ・汗をかいて働くことの尊さを実感
- ・自分の役割に誇りを持てた
- ・大きなイベントを支えているという実感を持てた②

○オリンピック、パラリンピックを体感

- ・生の試合を観戦することができた②
- ・選手の皆さんとのコミュニケーションが図れた③
- ・スポーツの祭典に参加できるという喜びを実感
- ・選手の意外な一面を見ることができた

○ボランティアならではの優遇措置

- ・ユニフォーム等のプレミアグッズが手に入る
- ・(残席がある場合) 入場券が優遇される

大きくは上記の5つに大別されるようである。その中でも「人的ネットワークの拡がり」「未知の体験」「自己実現」を挙げる協力者が多く、今回のボランティアは、自己の成長に役立つと考えて参加している人が多いものと推察される。

3-6 ボランティアに参加して残念だったこと (デメリット)

懸命にボランティアの役割に従事していても、その想いが報われないと思ったことがあるのではないかと。それは具体的にどのような場面であったのであろうか。

※複数の回答があった意見には、その人数を丸数字で表示

○ボランティアを統括する仕組みの不備

- ・運営本部からの助けがない
- ・正しい情報が入ってこない②
- ・必要ない情報が入ってくる
- ・シフトがきつい
- ・ボランティアの意見が全体の運営に反映されない

- ・オリンピック、パラリンピック自体の運営が混乱している
- ・運営本部の仕切りがワイルド（大雑把）
- ・仕事がない時間帯があり、何も指示がない
- オリンピック、パラリンピックの雰囲気を感じられない
 - ・競技を見ることができない
- ボランティアの存在を評価してくれない
 - ・参加証や表彰状などの仕組みがない
 - ・家から遠いが何の手立ても考えてくれない
- 来場者からの心無い対応
 - ・来場者の希望に添えなかった時に、（言葉が通じないと思って）明らかに口汚い言葉で罵倒された②
- 有給ボランティアへの不満
 - ・同じボランティアなのに有給の人がいる
 - ・有給ボランティアは特別なパーティがあるなど優遇されている
- 仕事内容に対する不満
 - ・役割により屋外と屋内の仕事があり、それぞれの負担の違いに不公平を感じる②
- ボランティアの体験自体が終わってしまうこと
 - ・この素晴らしい体験が終わってしまうことが寂しい

この設問については、多くの協力者が「全く問題はないが、あえて言うと・・・」という口調で回答している。そのような状況の中でも、ボランティアをマネジメントする仕組みについては熟慮を重ねる必要がある。特に無給で参加しているボランティアに対して、気持ちよく役割に徹することができるような環境整備と、その貢献を評価する仕組みを作ることは、ボランティアに支えられた大会運営をする以上、大切にしなければならない重要なポイントであると考えられる。

3-7 オリンピック、パラリンピックの開催がブラジルに遺したもの（レガシー）

大会を開催することが目的ではなく、開催した後に何を遺すかということが課題となっている。ボランティアとして携わった協力者たちは、その活動を通してブラジルに何がレガシーとして遺ったと感じているのであろうか。なお本項目については、有給ボランティアの意見も反映させることとした。

※回答者の数を〈無給／有給〉の各ボランティアに区別して表示する

- 国力の向上
 - ・国としての経験値が高まった〈①/0〉
 - ・組織的な動き（運営）ができるようになった〈①/0〉
 - ・今大会の成功はブラジルの“自信”“誇り”になった〈②/0〉
 - ・（私のような）高齢者が毎日健康に過ごせていること〈①/0〉

- ・みんなが幸せになった<①/0>
- ・外国との友好関係が広がった<①/②>

○生活環境の整備

- ・新しい交通機関が整備された<⑥/④>
- ・治安が良くなった<③/②>
- ・リオ市内の雰囲気が一変した（街の景観など）<③/②>

○経済面の向上

- ・一人ひとりの収入が増え、経済的に豊かになった（一方で、国民全体への再配分が課題であるとの意見もある）<③/0>
- ・生活に必要な物品が増え、何でも手に入るようになった（しかし物価が高い）<①/0>

○スポーツの豊富化

- ・（これまでサッカーの国というイメージであったが）スポーツの種類が増え、アスリート達の活躍の場が増えた<①/0>

大きくは4つに区分されるようである。「国力の向上」については、南米初のオリンピック・パラリンピック大会であることや、治安の悪化や伝染病など様々な不安要因を乗り越えてメガイイベントを運営できていることは大きな自信や誇りにつながっているようである。

多くの協力者が挙げていた点は「生活環境の整備」であった。特にバス路線の整備や新しい交通システムBRT（Bus Rapid Transit：バス高速輸送システム）の導入は、市民の生活の利便性を飛躍的に向上させたようである。

特筆すべき点は「スポーツの豊富化」が挙げられたことである。これまでサッカーの国というイメージが強かったブラジルにおいて、他のスポーツの活躍や健闘が連日メディアを通じて伝えられたことは、スポーツの価値が根付く大きな契機になったものと思われる。

「経済面の向上」については、一定の成果があったものの、物価の高騰が国民の生活を圧迫している状況があったり、貧富の差が激しいブラジルにおいて、それを是正すべき政治が混乱している状況であっても富の再配分を願う切実な想いを聞くことができた。

2020東京大会においても熱心に議論されているが、競技会場やその周辺環境整備をすることがオリンピック・パラリンピック競技大会開催後に、開催国にとってのレガシーとなるかは重要な視点である。その点で本大会は検討が不十分だったようで、終了後5か月が過ぎようとしている時点で、十分管理がされておらず、ましてや市民に活用されていない様子が各種報道されている^{[7][8]}。

3-8 オリンピックとパラリンピックの違い

オリンピックとパラリンピックの両方の大会を経験した協力者に対して、両大会の違いを聴いてみた。実際に担当して、それぞれの特徴や雰囲気の違いなどをどのように実感したのだろうか。なお本項目については、有給ボランティアの意見も反映させることとした。

※回答者の数を〈無給／有給〉の各ボランティアに区別して表示する

○大会の規模

- ・パラリンピックはブラジル人の来場者が多い〈①/0〉
- ・オリンピックの方が来場者数も多く、開催規模が大きい〈⑤/①〉
- ・オリンピックは大きなスポンサーが付き、大きな資金が動いたようである〈①/0〉
- ・パラリンピックはスポンサーが少なく、資金不足のようである〈0/①〉

○大会の雰囲気

- ・パラリンピックは障がいを持った選手たちのひたむきさや成長を目の当たりにでき感動的〈②/0〉
- ・パラリンピックは感情面に働きかける〈③/0〉
- ・障がいがあっても素晴らしいパフォーマンスを発揮している〈②/①〉
- ・パラリンピックは国民の関心も低かったように思う〈①/0〉

○報道の在り方

- ・パラリンピックは、チケットが75%売れているという報道だが、実際には盛り上がりを実感できない〈①/0〉
- ・人生をかけてメダルの獲得に挑む姿は共通しているはずであるが、その姿を扱う情報量がパラリンピックの方が少ないように感じられる。〈①/0〉

回答した協力者の中には「違いは無い」とする者もいたが、寄せられた回答を分類すると大きくは3つに区分されるようである。「大会の規模」については、オリンピックが206の国や地域から10,500人の選手が参加したのに対して、パラリンピックは159の国や地域から4,342人の選手が参加しているので、単純に規模が異なることは事実であろう。また、パラリンピックの開催期間が9月であることが、外国からの来場者が減り国内の来場者が多くなった要因であると推察できる。しかしながら、来場者数の減少以前にスポンサーの減少が大会の運営に影響を与えたと推察できる点については、2020東京大会に向けて大いに検討すべき点であると思われる。

「大会の雰囲気」については、ボランティアとして深く大会に関わった立場としては、パラリンピックの魅力は理解しているものの、国民全体の雰囲気としてはまだまだ関心が低いと実感しているようである。これは最後の区分である「報道の在り方」にも影響することであり、開催国の報道機関の使命として国民の関心を高める役割が期待される。

2020東京大会では、東京都の小池百合子知事が「オリンピックとパラリンピックを同等に扱う」との発言をしており、その実現に期待するところである。

3-9 ボランティアが持つ専門性

インタビューを進める過程であるポイントに疑問を感じた。前述表1の備考に記したが医療スタッフとしてボランティアを担当した女性は、現職も病院勤務の理学療法士である。インタビューの中で彼女は「自分の専門性がアスリートの役に立つのなら嬉しい」と語って

いたのでボランティア本人としては納得の上で担当したのであろう。

しかしながら2016年7月21日東京新聞掲載のコラム^[9]では、2020東京大会に向けた通訳ボランティアの扱いに対して批判的なコメントがあり、専門技術はタダではないとの主張が示された。

筆者としては、ボランティアをする者が納得しているのであれば問題ないと考えているが、それを受け入れる大会運営側がどのような方針で依頼するかは熟慮を重ねる必要があると考える。少なくとも「専門技術の搾取」「ボランティアの“やりがい搾取”」といった批判が出ないような正当な評価や処遇を考えるべきである。

4. おわりに

今回の協力者へのインタビューを通して、ボランティア達の参画意識を最大限に引き出すためのポイントとして次に示す3点が示唆されたと思われる。1点目は「ボランティア＝無償」の考え方。2点目は「ボランティア自身のモチベーションの醸成」。3点目は「ボランティアのマネジメント（評価の仕組み）」である。

1点目について、ボランティアの定義として辞書^[10]においては「自らの意志により参加した志願兵のこと。長じて、自主的に社会活動などに参加し、奉仕活動をする人のこと。また、奉仕活動そのものを指すこともある。」とされている。

また経済企画庁国民生活審議会が定めた指針^[11]によると「自発性に基づく行為であり、慈善や奉仕の心、自己実現、相互扶助、互酬性といった動機に裏付けされた行動。」とされている。

ボランティアはこれまで「時間の贈与」「自由選択」「無償性」の3点を焦点にしてきており、ボランティアを希望する側としては基本姿勢としてわきまえておく必要がある。課題となるのは、受け入れる側の姿勢として「ボランティア＝無償の労働力」と捉え、活動自体の目的達成や成果を求めるあまり、ボランティアの尊い志を軽視するような処遇は慎まなければならない。前述3-8の理学療法士や通訳ボランティアなど専門技術を持った人材の登用や、3-1(4)から得た情報の遠方から参加しているボランティアへの配慮などについては検討の余地があるものとする。

2点目について、2016年8月13日付けスポーツニッポン紙には「15,000人のボランティア現れず」との記事^[12]が掲載された。24万人の応募に対し、狭き門をくぐり抜けて公式ボランティアとして選ばれた5万人のうちの15,000人がどうして参加しなかったのであろうか。新聞では9時間以上の勤務や6勤1休のタイトなシフト、そして10日間以上参加することなどの厳しい条件が嫌気され参加を辞退したのではないかとの指摘がされていた。間違いではないだろうが、一方で今回のインタビューでは遠方から参加する場合の交通費の高騰や現地での宿泊施設が確保できないなどの理由により参加を見合わせたボランティアが多かったとの情報があった。いずれにしても、大きな目的を持ってボランティアに参加し、前述の3-5に示したような多くのメリットを感じてもらうためには、ボランティア自身のモチベー

ションをいかに醸成させるかが大きな課題となるであろう。それを解決するための重要なポイントとしては「独自情報の提供」と「事前研修プログラムの充実」にあると考える。「独自情報の提供」としては、イベントの準備状況を伝えたり、過去にボランティアの活躍により成功を収めたイベントの紹介をしたり、イベント関係者からボランティアに向けた期待のコメントを紹介したり、選ばれたボランティア達がイベントに参加することを楽しみにできるような仕掛けをすることが必要であると考え。「事前研修プログラムの充実」については、活動に携わる時点で不安を持つことなく担当できることを到達目標としてイベント概要の周知や全体における担当セクションの位置づけ、担当セクションでの役割、来場者とのコミュニケーションの取り方など、多岐にわたる内容が必要であると考え。本大会は3-2に示したように、3日間の研修が義務づけられ、内容的にも時間的にも適切であったと思われる。

3点目について、3-6に示した協力者が実感したデメリットは、ボランティアマネジメントへの不満と置き換えても過言ではないであろう。自ら選択し、報酬を求めず、更に時間的・金銭的な負担を承知して参加したボランティア活動において、自身の熱意が受け入れられなかったり、労働力の一部としてしか扱われない待遇は到底承服はできないであろう。2012年に開催されたオリンピック・パラリンピック競技大会ロンドン大会において、ボランティアは「大会を創る者」という意味で「ゲームズ・メーカー (Games Maker)」と呼ばれその活動が高く評価され、大会終了後も地域で行われるスポーツイベントのボランティアとして活動するなど、2012年ロンドン大会のレガシーのひとつに数えられている^[13]。ボランティアにやりがいを持って活動に参加してもらうためには、しっかりとしたボランティアマネジメントの仕組み、具体的には、本部の情報を一方的に伝えるだけでなく最前線で活動するボランティアの声を大会運営に活かす双方向の伝達の仕組みや、ボランティアの功績に対して謝意を表す表彰制度のような仕組み、そしてボランティアをその場限りの活動として終わらせるのではなく、まさにレガシーとして大会終了後も継続させ、ボランティアの重要性を啓発する仕組みとして活用することが求められていると考える。

2020東京大会の開催都市である東京都では、2020東京大会のレガシーとして8つのテーマ^[14]を掲げており、その中でボランティア文化の定着を明確に位置付けている。ボランティアの活躍を最大限に引き出すことが、2020東京大会の成否にかかわる大きなポイントとなるであろう。

引用文献

- [1] 公益財団法人日本オリンピック委員会, 第31回オリンピック競技大会 (2016 リオデジャネイロ) 大会情報, <http://www.joc.or.jp/games/olympic/riodejaneiro/>, ([アクセス日] 2017年2月21日)
- [2] 公益財団法人日本パラリンピック委員会, リオ2016パラリンピック競技大会概要, <http://www.jsad.or.jp/paralympic/rio/info/outline.html>, ([アクセス日] 2017年2月21日)
- [3] 公益財団法人日本オリンピック委員会, 第31回オリンピック競技大会 (2016 リオデジャネイロ)

日本代表選手団メダリスト・入賞者一覧, <http://www.joc.or.jp/games/olympic/riodejaneiro/>,
([アクセス日] 2017年2月21日)

- [4] 品川区, リオデジャネイロオリンピック視察報告書, p24, 2016年
- [5] 公益財団法人日本レクリエーション協会, リオデジャネイロオリンピックパラリンピックレク指導者派遣事業(仮称)関係者顔合わせ会資料, p2, 2016年
- [6] 片山昭義, 高齢者健康づくり事業におけるボランティア養成カリキュラムの開発, 「平成18年度筑波大学体育研究科研究論文集」, 第29巻, p551-554, 2007年
- [7] MEGA★BURASIL, オリ・パラから半年。オリンピック村はゴースタウン!?, http://megabrasil.jp/20170208_33780/, ([掲載日] 2017年2月8日 [アクセス日] 2017年2月10日)
- [8] フットボールチャンネル, ブラジルの聖地マラカナンが困窮。“料金未払い”で電気を止められる, <http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20170128-00010004-footballc-socc>, ([掲載日] 2017年2月8日 [アクセス日] 2017年2月10日)
- [9] 西山教行, 「五輪通訳ボランティア?」, 『東京新聞』, ([掲載日] 2016年7月21日)
- [10] Wikipedia, ボランティア, <https://ja.wikipedia.org/wiki/>, ([アクセス日] 2017年2月16日)
- [11] 経済企画庁国民生活審議会総合政策部会, 『市民意識と社会参加活動委員会報告』, 1994年
- [12] Sponichi Annex, 【リオ五輪】15,000人ほどのボランティアが担当する会場に現れなくなっている, <http://www.sponichi.co.jp/society/news/2016/08/13/kiji/K20160813013154300.html>, ([掲載日] 2016年8月13日 [アクセス日] 2017年2月10日)
- [13] 一般財団法人自治体国際化協会, 『2012年ロンドンオリンピック・レガシーの概要』, CLAIR REPORT No.402, p50-53, 2014年
- [14] 東京都オリンピック・パラリンピック準備局, 『2020年に向けた東京都の取組－大会後のレガシーを見据えて－』, p29-36, 2015年

Summary

Participation Awareness of Volunteers in 2016 Rio de Janeiro Olympic//Paralympic Games

Akiyoshi Katayama

We obtained an opportunity to work on the related project of Olympic//Paralympic Games held in Rio de Janeiro, Brazil in 2016, and conducted an on-the-spot interview survey for 20 official volunteer staffs of the event. Three points of maximize participation awareness of volunteers were suggested, while a lot of very prospective opinions were heard. The first one is to correct a way of thinking that “volunteer works are free service”. The second one is the right way to raise motivation of volunteer themselves. The third one is establishment of the management (structure of the evaluation) of volunteers. These points seem to be important ones associated with the success or failure of 2020 Tokyo Olympic//Paralympic Games.

Keywords Olympic Games, Paralympic Games, Official Volunteer, Participation Awareness

(2017年5月18日受領)